

ミューザゴラの創設に基づく地球未来学の振興

① ビジョンの概要

自然環境と人類社会の抱える諸課題を、地域から地球規模までグローバルに解決するために、産学公民の多様な主体が「地球未来市民」として包摂的に対策を共創し実践する世界を実現する。その世界では、未来世代がよりよく生存し続けていける可能性を科学的に思考し共創する方法論としての「地球未来学」を修得した越境人材が、展示対話空間たる「ミューザゴラ」を拠点として、多主体共創を先導していく。

② ビジョンの内容

プロセス (内容・方法)	アウトプット (結果)	アウトカム (成果)	インパクト (波及効果)
WP1 基本構想の策定 WP2 関連機関/活動の調査 WP3 コンテンツの制作 WP4 展示対話の実践 WP5 評価と方法論体系化	①地球未来ミューザゴラ の設計案 ②地球未来学の教科書と 教材、人材育成プログラ ム	ミューザゴラが創設され、 地球未来学を修得したイ ンタープレナー(越境人 材)が、産学公民の多様 な主体による課題解決を 先導ようになる	展示対話を通じて来場者 が地球未来市民に加わり、 課題解決策を多主体が共 創し実践するのが当たり 前の世界が実現する =新しい学術のあり方

図1 ミューザゴラの実現に至る道すじ

温暖化や大気・海洋汚染をはじめとする地球環境の悪化や、社会の分断と対立の進行など、自然環境と人類社会の抱える諸課題は、一国では解決できない地球規模の問題である。これらの諸課題を地域から地球規模に至るあらゆるレベルで解決するために、産学公民の多様な主体(アクター)の個々人が「地球未来市民」として包摂的に対策を共創し実践するのが当たり前の世界を実現する。その世界では、未来世代がよりよく生存し続けていける可能性(未来可能性)を科学的に思考し共創する方法論としての「地球未来学」を修得した越境人材である「地球未来インタープレナー」が、展示対話空間である「ミューザゴラ」を拠点として、多様な主体による共創を先導していく。また、展示対話を通じて来場者が地球未来学の理念に共感し、課題解決に向けた活動に参画することで、地球未来市民が増えていき、地球未来学が社会に浸透していく。

課題解決の拠点として創設するミューザゴラは、展示空間たるミュージアム(museum)と対話・共創の場たるアゴラ(agora)を足し合わせた新造語で、漢字を当てると「展示対話空間」である。ここでいう展示とは、従来の物理的な空間だけでなく、仮想空間やリモート環境を組み合わせることにより、展示の制作者と来場者の双方向コミュニケーションを創発し、対話を引き出す機能をそなえたものである。

地球未来市民が活躍する場はコミュニティーである。ここでいうコミュニティーとは、物理的空間においても、近年発展のめざましい仮想空間(メタバース)においても、顔の見える範囲で対話できる共同体を想定する。「Think Locally, Act Glocally」という発想に基づいて、地球規模の課題と未来のあるべき姿を意識しつつ、顔の見える範囲で当事者意識を持って課題解決に参画し、地域から地球規模に至るあらゆるレベルでグローバルに対策を共創し実践する。

現在の我が国では、少子高齢化に加え、コミュニケーションのオンライン化やコロナ禍による対面機会の減少に伴って、地域社会の人的結合が弱まり、社会の分散化が加速しつつある。その中であって、環境保全や減災、まちづくりなど、地域の環境社会課題に対処するためには、従来のコミュニティーの外から参画する人々(関係人口)も含めた、企業(産)、大学・研究機関(学)、行政(公)、NPO・住民(民)の新しいコミュニティーが、当事者意識をもって自律的かつ持続的に行動していくのが望ましい。多様な価値観が包摂的に融合することにより、イノベーションの創発が期待される。イノベーションの創発にあたっては、組織の枠を超えて新産業を共創するインタープレナー(越境人材)の活躍に学ぶところがある。

その一方、変革に向けて活動の中心となって積極的に行動するインタープレナーやその支援者は少数派にとどまり、反対はしないが積極的な関与もしない「低関心層」と、関心はあるが生活上の余裕がなく「声の小さい」主体が周縁化しているという現実がある。そのため、インタープレナーを中核としつつ、多様性と包摂性に配慮して、周縁化されている主体を課題解決に巻き込んでいける仕組みづくりが必要である。

③ 学術研究構想の名称

ミュージアゴラの創設に基づく地球未来学の振興

④ 学術研究構想の概要

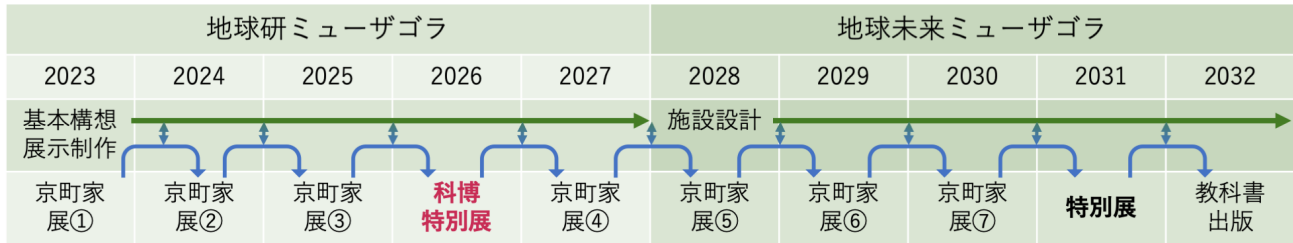


図2 ロードマップとマイルストーン

大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所（地球研）が主導機関となって、ミュージアゴラの試行と設計を通して、地球と人類社会の未来のあるべき姿を多角的かつ総合的に問う学術領域である地球未来学を振興する。ミュージアゴラは、課題解決を先導する地球未来インタープレナーを育成し、地球未来市民を増やす場と位置付ける。前半5年間は、地球研がこれまでに推進してきた共同研究プロジェクトの成果を題材として、展示対話を実践し、そこから得られた知見を「地球未来ミュージアゴラ」の構想に取りまとめる。後半は展示対話の対象を拡張し、ミュージアゴラ的设计を具体化させ、博物館学、科学社会学、心理学、脳科学、教育工学、情報工学、芸術工学等の知見を総合して学術的に体系化する。展示対話コンテンツ、地球未来学の教科書と教材、および地球未来インタープレナーの育成プログラムを、最終的な成果物とする。

⑤ 学術的な意義

地球未来学は、地球と人類社会の未来のあるべき姿を多角的かつ総合的に問う学術領域である。それは、地球と地域の環境問題にとどまらず、人間と社会、そして自然との関わり方を問い直すべき諸課題を包摂するものである。また、学術界にとどまらず、広く社会に普及していくべき知識体系でもある。

科学技術・イノベーション基本計画にうたわれる総合知を課題解決に活用するには、科学的思考に基づく知の共創力を身につけた「学術インタープレナー」が、コミュニティの内外から課題解決に向けた行動に関与することにより、その潜在能力（ケイパビリティ）を引き出し活性化する必要がある。すなわち、科学的思考と共創力が学術インタープレナーの中核能力（コアコンピテンシー）である。これを身につけた学術インタープレナーが学術界にも社会にも受け入れられ、科学のあり方そのものを大胆に変革していく。

⑥ 国内外の研究動向と当該構想の位置付け

社会の課題に対応するための研究方法論としては、アクションリサーチやトランスディシプリナリー（TD、学際共創、超学際）研究が実践されてきたが、市民の主体性保証に課題がある。科学技術コミュニケーションに基づく社会共創教育は、東京大学・北海道大学・大阪大学等で進められており、各地の美術館や博物館も市民との対話を取り入れつつあるが、総合知の実践は発展途上である。

⑦ 社会的価値

ミュージアゴラは公開を前提とし、地球のよりよい未来についての知見を発信・共有するものであり、その創設と推進には国民の理解が得られるとともに、来館者による社会経済効果が見込まれる。

⑧ 実施計画等について

実施計画・スケジュール 前半の5年間（令和5～9年度）は、地球研の既存研究プロジェクトの成果物を題材として、京町家ギャラリーを会場とする「地球研ミュージアゴラ」における展示対話を試行する。その成果を踏まえ、後半の5年間（令和10～14年度）に、地球未来ミュージアゴラのグランドデザインを設計する。

実施機関と実施体制 地球研を主導機関とする。前半5年間に人間文化研究機構の「開かれた人間文化研究を目指した社会共創コミュニケーションの構築」事業を活用しつつ、関係省庁、自治体、企業、事業体、市民等との対話・共創を通してネットワークを拡充していく。

総経費 1,524百万円（設備備品費10、消耗品費10、人件費1,170、旅費120、その他委託費等214百万円）

⑨ 連絡先

近藤 康久（大学共同利用機関法人 人間文化研究機構総合地球環境学研究所）